

学部における心理学専門教育の 導入に関する一研究（3）

－心理学専門教育における初学者の
学びのプロセスに関する考察－

川 島 一 晃・芳 賀 康 朗・
望 木 郁 代(三重大学医学部医学・看護学教育センター)

〈要旨〉 心理学を専攻することに決めた初学者がどのような学習上の課題を体験し、どのような学びを得ているかについての質的な検討はあまりなされてこなかった。本研究の目的は、学生が経験する学習上の課題とプロセス、そして取り組みから得られるメリットについて探索的に検討し、示唆を得ることであった。心理学を専攻している学生5名を対象に、卒業研究に対する取り組みについて半構造化面接を実施した。修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を用いて分析し、最終的に10のカテゴリーと13の概念が得られた。〈興味・関心〉から出発した卒業研究の取り組みは、〈自分で調べる〉作業を経て、〈第一のつまづき [知識不足]〉を経験する。〈知識の整理の工夫〉に勤めながら〈心理学概念につなげる〉ことに成功すると進展するが、次に〈第二のつまづき [停滞]〉を経験する。〈思考の整理の工夫〉を繰り返し、自身のテーマと向き合う中で〈研究の方向性の定着〉に至り、〈研究の楽しさの発見〉を経験するという、学生の取り組みのプロセスモデルが得られた。

〈キーワード〉 初学者， 卒業研究， プロセス

1. 問題と目的

学部における心理学専門教育の導入に関する先の報告（芳賀・川島，2015）において、文学部コミュニケーション学科において策定された心理学教育のプログラムの現状と課題を報告した。本稿では、心理学を専攻することを決めた学生の学びのプロセス、特に学習上の困難や初学者の取り組みのプロセスについて、面接法による調査の結果を報告する。特に修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）（木下，2003；木下，2007）を用いて、モデルの生成を行うことで、学生の語りに基づく心理学の初学者に特有の学習上の課題を整理することを本研究の目的とする。

1-1. セミナールにおける心理学専門教育の内容

多くの心理学専門教育において、特にゼミナール（専門演習）での中心的な学びの素材は、学生が自身の研究関心に基づいて心理学研究を立案する演習となる。小塩・宅（2015）は、卒業研究の製作の過程を「10のステージ」に分け、それぞれステージごとに「7つのポイント」を整理し、取り組みのポイントを挙げている（表1）。また都筑（2006）は心理学論文の書き方を解説し、細かく留意点を整理している（表2）。いずれの知見からも、心理学の卒業研究の出発点は、「研究のアイディアの洗い出し」や「先行研究の購読」などの準備作業を経ての「研究テーマの設定」であり、研究テーマが明確になった上で「仮説を吟味」し、研究に適切な「方法論の選択」や「データの分析方法の検討」「データの収集」「分析の実施」「結果の整理」「考察の検討」という順序で構成されている。これらの研究を進める一連の作業は、個人単位での取り組みがベースとなるが、ゼミナールの中では、研究の進捗を定期的に報告する他の学生の研究発表から学ぶモデリングをはじめ、教員とのディスカッションや指導が存在する。学生の学びの土台には、関係性の中で相互に影響し合う学習環境が想定される場合がほとんどである¹。

表1 卒業研究に関する取り組みの10ステージ(小塩・宅(2015)を参考に作成)

ステージ1：「さあ、はじめましょう」	ステージ6：「データを整理しよう」
① 漠然として思いやなんとなく気になっていることを紙に書いてみよう	① データを整理しよう
② 他の人がどんなことを気にしているか見てみよう	② 尺度水準について考えてみよう
③ 身近な話題に目を向けてみよう	③ 人口統計学的変数について考えてみよう
④ 周囲の人にアイデアを話してみよう	④ 参加者の情報を整理しよう
⑤ 研究で使うキーワードを探そう・論文のキーワードを調べてみよう	⑤ データ収集手続きを整理しよう
⑥ 英語のキーワードも調べてみよう	⑥ 英語の論文の「方法 Method」の部分を読んでみよう
⑦ 研究テーマを設定してみよう	⑦ 「方法」の部分を書いてみよう
ステージ2：「アイデアの絞り込みをしよう」	ステージ7：「分析してみよう」
① 論文を探してみよう	① 分析のストーリーを描いてみよう
② 英語の論文も探してみよう	② 分析作業を始めよう
③ 日本語の要約を読んでみよう	③ 仮説が検証されたか考えてみよう
④ 英語の要約を読んでみよう	④ 基本的な分析も押さえておこう
⑤ 論文の図表を読んで結果を読み取ろう	⑤ 他の分析方法も試してみよう
⑥ 英語を使ってリサーチクエスチョンを考えてみよう	⑥ テイクホームメッセージ*を考えよう
⑦ リサーチクエスチョンを立てよう	⑦ 論文の「結果」の部分を書き始めよう
ステージ3：「方法を選択して仮説を立てよう」	ステージ8：「結果の部分を書こう」
① 研究方法を考えてみよう	① 目的と仮説を文章にまとめよう
② 他の研究方法を考えてみよう	② 仮説に対応する結果をまとめよう
③ 研究方法をまとめよう	③ 表を作ろう
④ 重要な先行研究を調べよう	④ 図を作ろう
⑤ 重要な先行研究の知見を整理しよう	⑤ 結果のストーリーをつくらう
⑥ 英語の論文の知見も整理して、自分の研究の参考にしよう	⑥ 英語の論文で図表がどうまとめられているか見てみよう
⑦ 仮説を立てよう	⑦ 「結果」の部分を上げよう
ステージ4：「データを集める準備をしよう」	ステージ9：「問題と目的・考察の部分を書こう」
① どれだけデータを集めればよいのか考えよう	① 論文の導入部分を書こう
② 研究倫理について考えてみよう	② 仮説に向けたストーリーをつくらう
③ 材料・道具を準備しよう	③ 「問題と目的」の部分を上げよう
④ 必要な書類を用意しよう	④ 「考察」の部分に書く内容を整理しよう
⑤ データを集める準備をしよう	⑤ 「考察」の部分を書き、限界と応用可能性、今後の課題を考えよう
⑥ 海外の研究で使われている同意書を見てみよう	⑥ 英語の論文を見てみよう
⑦ 予備調査・予備実験をしよう	⑦ 論文の各部分を仕上げよう
ステージ5：「データを集めよう」	ステージ10：「書き上げてチェックしよう」
① データを集め始めよう	① 論文の構成を整えよう
② 分析の手順を思い浮かべながら、どのソフトウェアを使うかを決めよう	② 仲間に読んでもらおう
③ 分析方法のマニュアル本を見てみよう	③ 要約を書こう
④ 分析方法が書かれたウェブサイトを探そう	④ 引用文献リストの体裁を整えよう
⑤ ソフトウェアを操作してみよう	⑤ 最終確認をして論文を提出しよう
⑥ 論文に書かれているデータ分析の手順に関する記述を見てみよう	⑥ 英語でのプレゼンテーション技術を参考にしよう
⑦ 集めたデータを確認しよう	⑦ 発表準備をしよう

*テイクホームメッセージとは、聞き手ないし読み手に、忘れずに家まで持って帰ってもらいたいメッセージを指す

表2 心理学論文の書き方におけるポイント（都筑（2006）を参考に作成）

1. 研究テーマの設定	3. 研究を実施する
① 研究テーマを絞り込む	① 目標と期日を定める
② 頭の中を整理する	② 参加者に対する責任を自覚する
③ 集中して考える時間を取る	③ インフォームド・コンセントを取る
④ 研究の形を作っていく	④ 結果をフィードバックする
⑤ 研究の課題を明確にする	⑤ 研究データを慎重に管理する
2. 研究スケジュールの設定	4. データを分析する
① 研究のスケジュールを作る	① ローデータを眺める
② 参加者の人数を確保する	② 欠損値やはずれ値に注意する
③ 参加者に気遣いをする	③ 情報を集約する
④ 異なる視点からチェックする	④ データの特徴をあらわす
	⑤ 検定を行う
	⑥ 図表にして視覚的に検討する

1-2. 心理学研究を立案する難しさ

自分が取り組もうとする研究のテーマについて、何となく存在する「イメージの段階」から「言葉として紡ぐ言語化の段階」へと進める作業は、多くの初学者にとって混乱と戸惑いを体験となることが予想される。「心理学には関心があるけれど、一体どの心理学概念に自分は関心を寄せているのだろう」、「自分はそもそも何がしたいのだろうか」、「やりたいことは何となく見えてきたけれど、その研究の意義はどのように表現すればよいだろう」など、心理学の研究を開始する初学者において研究テーマを設計していく作業はこのような内なる問いとの断続的な取り組みが想定される。研究自体が初めての体験であり、自分自身の関心を言語化していくという慣れない作業と相まって、非常に難しい課題であることが、ゼミナールにおける学生の観察からも伺われる。

本研究において、検討しようとしている初学者の学習上の困難も、この研究テーマの設定をはじめ、上述の研究の展開に沿って生じてくることが予想される。前節で紹介したように、研究テーマの設定の準備作業として、先行研究の購読やキーワードの選定といった学びの段階が想定される。自分の中にある関心を手掛かりとして、心理学の知見を調べる過程では、専門用語を整理することや論文に示される結果や考察を理解するという一連の作業が不可欠である。この作業を円滑かつ効率的に進めるためには、一定の心理学的知識や統計学的知識が必要となってくるだろう²。「こころ」を扱う心理学において、自身の

内省を言語化し、整理しながら既にある知見を参照して、研究を作り上げていく作業自体は、自分自身の関心を展開する大いなる楽しさであると言える。しかし、それは経験者には理解できるものの、初学者にはなかなか実感としては体験されないのかもしれない。実際に目や手で客観的・物理的に確認することができない「こころ」という構成概念を扱う心理学においては、自分自身の関心をも、客体として明確な形で確認することが困難である場合が多い。このことが研究テーマを言語化する際に、困難として現れてくるということも考えられる。

1-3. 本研究の目的

多くの学生が自身の体験している日常的な課題や、これまでの身近な経験を手掛かりとして、テーマ設定を試みるため、学生にとって研究から得られる学びは、自分自身の理解や生活に直接的に反映されることが期待される。しかし、ゼミナールでの学習経験が具体的にどのように体験されているかについて言及する研究は、あまり見当たらない。学生が心理学を実際に学ぶ過程で、どのような困難に直面し、またどのように工夫しながら研究を進めているかを整理し、そのプロセスの中からどのようなメリットを得ているかを検討することで、心理学専門教育の中で学生が体験している学びの内容を捉えることができるだろう。

ここまで述べてきた本研究の目的を整理する。本研究では、心理学を専攻することに決めた初学者が①どのような学習上の困難を体験しているか、②どのような要因が学習の進展に寄与しているか、③心理学を学ぶことで得られるメリットはどのようなものであるか、について、探索的に検討することを目的とする。またその際、学びのプロセスをできるだけ具体的に捉えることが有益と考えられるため、質的な観点から検討を行う。

2. 方法

2-1. 調査協力者

これまで述べてきたとおり、本研究はコミュニケーション学科において策定

された心理学専門教育カリキュラムの導入効果について検討する研究であり、実際に心理学を専攻している初学者を対象とする必要があることから、コミュニケーション学科において心理学を扱うゼミナールに所属する学生を調査対象とした。研究の趣旨を説明した上で、研究協力を依頼し、承諾を得た5名を調査協力者とした（表3）。調査協力者の回答および属性については、本研究で検討するために必要な情報を除き、できるだけ個人が特定されないよう配慮した。

表3 調査協力者一覧

ID	学年	進路	面接時間
Case A	4年	就職	21m04s
Case B	4年	就職	32m33s
Case C	4年	進学	18m12s
Case D	3年	進学	22m56s
Case E	3年	進学	28m53s

2-2. データの収集

データの収集には、半構造化面接法を採用した。面接にあたって、①研究の趣旨、②録音の可否、③情報の保護、④調査協力者の研究取りやめの権利について、口頭で説明し、同意を得た。面接の内容は調査協力者の了解を得て、すべてICレコーダーに録音し、逐語化したものをデータとして扱った。

調査時期：2016年8月～9月に研究室において実施された。

調査内容：①心理学を専攻に選んだ理由、②ゼミナールでの卒業研究の進め方、③研究の中で困ったこと、④困った際の対処と支援の内容、⑤心理学を学んで良かったこと、⑥心理学を専攻しようとする後進へのアドバイス・エール、について調査協力者の体験・考えをできるだけ具体的に語ることを求めた。面接に要した時間は、一人当たり平均24.2分であった。

2-3. データの分析方法

本研究は、初学者の専門教育における学習上の課題についての探索的・仮説生成的研究であることから、質的研究法を採用した。質的研究法は、まだ十分

に明らかにされていない現象や個人の体験の特徴を探索的に捉える場合に有効な研究方法であるとされる方法論（能智，2000）である。また質的研究法の中でも、M-GTAを採用した。M-GTAは木下（2003；2007）が提唱したアプローチで、質的研究法の1つとして著名なグラウンデッド・セオリーを修正したものである。今回の学生の学びに関する語りは継時的な性格を有しており、学習上の困難を検討していく上で、得られた語りの文脈的な要素を検討するためには、グラウンデッド・セオリー・アプローチが適切であると判断された。

2-4. 分析の手続き

本研究における分析テーマは「心理学を専攻する初学者における学びのプロセス」と設定し、分析焦点者を「心理学を専攻し、ゼミナールの学習において、困難を体験した初学者」とした。面接の逐語データを木下（2003；2007）に則り、以下の分析を行った。

①概念の生成：得られたデータのうち、分析テーマと関連する箇所に注目し、分析焦点者にとってどのような体験・意味と理解されるかという視点から、具体例を抽出した。複数の具体例を素材として、具体例を説明しうる概念を生成した。その名称、定義、具体例をワークシートに記入し、概念生成の作業を繰り返した。その際、概念名の妥当性の吟味を作業の度に行い、具体例に即さない場合は、定義および概念名の改変を行った。M-GTAにおいては、作成された概念の具体例が同じ調査協力者のデータからしか生じない場合は、成立しないと判断する場合があるが、本研究では調査協力者の個別性を重視する観点から、できるだけ多様な概念の成立を優先した。得られたデータから新たな概念が生成されない段階を理論的飽和と解釈し、次の作業に移行した。

②カテゴリーの生成：概念が一定に生成された段階で、概念間の関係性を個別に検討し、関係図を作成した。そして集約された概念のまとまりをカテゴリーとして生成した。基本的には複数の概念によって構成される上位概念の生成に努めたが、単独で存在することにも意味があると判断された概念については、単独でカテゴリーとして扱うこととした。概念間の関係性において何らかの動的プロセスが想定されるか否かを基準として、関係図を作成し、吟味、修正を

繰り返した。なお分析の作業は、心理学を専門とする複数の研究者で行い、その内容について検討することで、分析内容の妥当性の担保に努めた。

3. 結果と考察

3-1. 抽出された概念とカテゴリー

面接調査から得られたエピソードを分析し、最終的に10のカテゴリーと13の概念が得られた。表4に得られたカテゴリー、概念とその定義を示した。また表中の括弧には、該当する概念・カテゴリーが得られたエピソード数を示した。以下、カテゴリーを<>、概念を【 】、代表的な語りのエピソードには下線を示し、学生の学びのプロセスに関するカテゴリーを説明する。

表4 本研究で得られたカテゴリー、概念とその定義

カテゴリー名	概念名	定義
1) <興味・関心> (6)		自分の研究に関連する事象に対する興味・関心
2) <自分で調べる> (6)		関心を寄せた事柄について、論文・著書など文献を検索する
3) <第一のつまづき> [知識不足]	心理学の専門用語や論文の内容が分からない (3) やりたいことが見つからない (2)	著書や論文に書かれている専門用語や論文の分析結果の内容を理解することができず困惑する 自分が関心を寄せていることが、具体的に心理学のどのような概念に関連するのかわからず困惑する
4) <知識の整理の工夫>	研究ノートを書く (2) 日常のエピソードを整理する (3) キーワードを調べる (5)	研究ノートに自分の興味・関心を書き出す 日常生活の中で興味・関心を寄せた事柄を整理し、書き出す 浮かび上がってきたキーワードを使って、論文などの資料を調べる
5) <心理学概念につなげる> (5)		自分の興味関心を心理学の構成概念に関連させて表現し、関連する概念や先行研究を調べる
6) <第二のつまづき> [停滞]	研究テーマの内容における停滞 (6) 卒業研究の進め方が分からない (4)	自分の研究テーマが本当にやりたいことなのか確信を持って、戸惑ったり、最終的にどのような結論を導きたいのかわからなくなり混乱する 今取り組んでいることの次にどのような作業を行えばよいか分らず、卒業研究の取り組み方が見えないことで困惑する
7) <思考の整理の工夫>	個人で1つずつ考えを整理する (4) 仲間とのディスカッション (6)	じっくりと時間をとって、自分の考えを焦らずに1つずつ整理する 教員やゼミの仲間に、今困っていることや今後どのようにしたいかなど、研究について語り、相手に意見を求め、議論する
8) <研究テーマの変更> (2)		これまで取り組んできた研究テーマを見直し、異なる興味・関心から再度テーマ設定に取り組み
9) <研究の方向性の定着>	自分の中の研究の軸が明確になる (1)	この次にどのような作業に取り組むことが課題なのか明確となり、進むべき道筋を捉えることができる 自分の中でブレない研究の軸が見えてくることで、自分の研究の意義やオリジナリティを捉えることができる
10) <研究の楽しさの発見>	新しい知識獲得の喜び (3) 研究が楽しい (2)	心理学の知識を得ることに、喜びを感じ、さらに調べようとする動機づけが生じる 研究で停滞することや課題があることは認識しながらも、研究することの楽しさを感じることができ

() の中の数字は得られたエピソード数を示す。

1) <興味・関心>

<興味・関心>は、自分の研究に関連する事象に対する興味・関心を意味する。私自身がちょっと思い込みが激しかったりすることがあったので、最初のうちはすごく思い込みについて知りたいなというところがあった（CaseA）。どの調査協力者のエピソードにも研究の最初の段階で自分の興味・関心を出発点とする語りが得られた。

2) <自分で調べる>

<自分で調べる>は、自分が関心を寄せた事柄について、論文や著書など文献を検索することを意味する。まず最初に記憶に関心があったので、インターネットで記憶を検索して、いろいろ読んでいく中で感情というものによって変わったんですけど、今度はそれをもとにその用語で論文を引いて調べたり、また論文を探してと、、、（CaseC）。ゼミナールにおける取り組みの初期の作業として、自分なりに文献を調べてまとめる作業が共通して語られた。

3) <第一のつまづき [知識不足]>

<第一のつまづき [知識不足]>は、学生が卒業研究の取り組みの中で最初に困難だと感じ、つまづく課題を意味するカテゴリーである。このカテゴリーは【心理学の専門用語や論文の内容が分からない】【やりたいことが見つからない】の2つの概念から構成される。【心理学の専門用語や論文の内容が分からない】は、教科書や論文に記載されている心理学の専門用語の意味が分からなかったり、論文に示されている分析結果を読み解くことができずに知識を得る段階で困惑することを意味する。これまで心理学の授業を全く受けていないところからスタートなので、1つ1つ調べるにしても、全く用語が分からない（CaseA）など、特に心理学専門教育カリキュラムが策定されていなかった4年生において顕著に語られた。しかし、カリキュラムを経験している3年生からも、勉強はしていますけれど、論文を読もうとしても（中略）時間もかかりますし、わからないですし、そういう時は先生に相談をするようにしていました（CaseE）と知識を蓄積していく段階において困った経験が語られている。【やりたいことが見つからない】は、自分が関心を寄せていることが、具体的に心理学のどのような概念に関連するのかが分からず、どのように表現

するとよいかと困惑することを意味する。自分が見つけたい物がなかなか見つからない（中略）たくさんの本とか論文とかを読むと混乱したりする（CaseD）と、模索する中で混乱する体験が語られている。

4) < 知識の整理の工夫 >

< 知識の整理の工夫 > は、学生が調べたり、学習することで収集した心理学の知識を自分の卒業研究に役立てるために整理する取り組みを意味するカテゴリーである。このカテゴリーは【研究ノートを書く】【日常のエピソードを整理する】【キーワードを調べる】の3つの概念から構成される。【研究ノートを書く】は、自分自身の研究のアイデアや関連する知見をノートに書くことで整理する作業を意味し、ゼミでは研究ノートの提出があって、自分の考えていることを書き込むんですけど、その内容を指導教員の先生がまとめてくださったり、アドバイスを下さったことが助けになりました（CaseB）といったエピソードが代表的である。【日常のエピソードを整理する】は、日常生活の中で気になった現象やエピソードをメモし、研究に関連する日常的体験を書き出すことを意味する。過去を振り返って、この思い込みはどういうものが多かったのかなどを考えて、そこからあったことを挙げて行って先生とディスカッションをする中で、今の自分の研究テーマにたどり着けた（CaseA）など、具体的な体験を素材として研究のきっかけとする語りが得られている。【キーワードを調べる】は、浮かび上がったキーワードを使って、論文などの資料を調べる作業を意味する。論文を調べて、そこで出てくるキーワードを整理して、教員にコメントを求めて、そこでまた違うキーワードがあって、また論文に戻っていくというサイクルを繰り返した（CaseE）など、新たに知識を得て精緻化していく取り組みが語られた。

5) < 心理学概念につなげる >

< 心理学概念につなげる > は、これまでに収集してきたエピソードやキーワードを素材にして、自分自身の研究の関心を心理学の構成概念に関連させて表現し、関連する概念をさらに調べる取り組みを意味する。キーワードが見つかったらそれを論文で調べて、自分が疑問に思ったことを辿って調べていく（中略）わからない言葉をさらに調べて進めていったら意外とテーマは決まっ

た（CaseC）といった研究の具体的なキーワードを辿って調べることで、徐々に自分の研究テーマとなる構成概念に辿り着く取り組みが語られた。

6) < 第二のつまづき [停滞] >

< 第二のつまづき [停滞] > は、学生が卒業研究の取り組みにおいて、第二のつまづきとしてぶつかる課題を意味する。このカテゴリーは【研究テーマの内容における停滞】と【卒業研究の進め方がわからない】の2つの概念から構成される。【研究テーマの内容における停滞】は、自分の研究テーマが本当にやりたいことなのか確信を持たず、戸惑ったり、最終的にどのような結論を導きたいのかがわからなくなり混乱することを意味する。○○をメインに卒業論文を書こうと思ったけど、実際本当に自分が何をしたいのかな、何に興味があるだろうなど、立ち止まってしまって、研究に一切触れない時期もありました（CaseE）という語りが代表的である。【卒業研究の進め方がわからない】は、今取り組んでいることの次にどのような作業を行えばよいか分からず、卒業研究の取り組み方が見えないことで困惑することを意味する。心理学の知識は全然なかったので、どういう風にやればよいか分からず困ったので、先生に聞いたり、心理学の分野ではないけど、卒業論文や修士論文を実際に書いた経験のある兄に相談して、どのように書いたら良いかなど聞いてみたり、（CaseC）といった研究の内容とその進め方それぞれにおいて、見通しの見えなさから生じる困惑が停滞を引き起こす体験が語られた。

7) < 思考の整理の工夫 >

< 思考の整理の工夫 > は、上述の第二のつまづきを打破するべく、自分自身の中にある研究の方向性や内容についての考えを整理する工夫を意味する。このカテゴリーは【個人で1つずつ考えを整理する】と【仲間とのディスカッション】の2つの概念から構成される。【個人で1つずつ考えを整理する】は、じっくりと時間をとって、自分の考えを焦らずに1つずつ整理することを意味し、時間はかかるんですけど、とりあえず書いてみて、違うと思ったら消して直して、また考えてという試行錯誤ですね（CaseB）という語りが代表的である。【仲間とのディスカッション】は、教員やゼミの仲間、今困っていることや今後どのようにしたいかなど、研究について語り、相手に意見を求め、議

論することを意味し、（研究が停滞している間は）先輩や先生とか友人と、（今自分は）どうかがしたいんだろうか、でも自分はこういうことを考えているのだけど、と話してみる、、、（CaseE）といった語りが得られた。

8) < 研究テーマの変更 >

< 研究テーマの変更 > は、これまで取り組んできた研究テーマを見直し、異なる興味・関心から再度テーマ設定に取り組むことを意味し、何のためにそのテーマにするのか検討が不十分のまま方法などに進んでいくと、次に進めなくなった、、、（ので再度自分の関心を問い直し、結果テーマを変更した）

（CaseB）といった研究の進捗でぶつかる課題を踏まえ、研究の内容を吟味した上で、再度テーマの設定に取り組む決断についての語りが得られた。

9) < 研究の方向性の定着 >

< 研究の方向性の定着 > は、自分の研究が今後どのような方向で、進めていけば良いのかが明確となり、自分の研究を自信を持って語ることができるようになる状態を意味する。このカテゴリーは【次の課題が明確になる】【自分の中の研究の軸が明確になる】の2つの概念から構成される。【次の課題が明確になる】は、この次にどのような作業に取り組むことが課題なのかが明確となり、進むべき道筋を捉えることができることを意味し、教員や仲間と話すことなどによって相手、話した人の新たな視野が加わるので、より大きな広い視野で研究を見れるようになって、（次に何をするかなど）悩みの解決につながった（CaseA）といった語りが代表的である。また【自分の中の研究の軸が明確になる】は、自分の中でブレない研究の軸が見えてくることで、自分の研究の意義やオリジナリティを捉えることが可能となることを意味し、自分のアイディアを組み込んでいく軸ができるというか、ほんわかしているんですけど、それを先輩や先生に、「こういうかがしたい」と話すうちに、「ぶれない、絶対ここはゆずれない」というのができてきて、、、（CaseE）という語りが得られている。

10) < 研究の楽しさの発見 >

< 研究の楽しさの発見 > は、自分の研究に取り組む「楽しさ」を体験している状態を意味し、このカテゴリーは【新しい知識獲得の喜び】と【研究が楽

しい】の2つの概念から構成される。【新しい知識獲得の喜び】は、心理学の知識を得ることに、喜びを感じ、さらに調べようとする動機づけが生じることを意味し、本を読みだすと、自分が知らない知識とか、新しいこと、新しい考え方・見方というのが身につくというか、知ることができて、今知らない知識はまだたくさんあると思いますけど、その先にはまた自分が新しく知る知識があるという喜びです（CaseE）といった語りが代表的である。【研究が楽しい】は、研究で停滞することや課題があることは認識しながらも、研究することの楽しさを感じることができている状態を意味し、実際、今研究は迷走はしてますけど、研究は楽しいかなと、、、（CaseD）という語りが得られた。

3-2. 学生の語りから生成された学習上の課題と学びのプロセスモデル

本節では、先述のカテゴリー間の関係性を分析し、得られた学生の学習上の課題と学びのプロセスモデル（図1）について述べる。

卒業研究の取り組みの最も土台となるものは、学生が卒業研究で取り組む対象に対する〈興味・関心〉であると考えられる。自分が関心を寄せた事柄について、論文や著書など文献を検索する〈自分で調べる〉作業を経て、学生は〈第一のつまづき [知識不足]〉を経験する。具体的に言えば、心理学的知識の不足から【心理学の専門用語や論文の内容が分からない】ことや、調べていく中で【やりたいことが見つからない】という経験は、卒業研究を開始した学生にとって最初につまづきのポイントであると言える。そのつまづきを打破するため、【研究ノートを書く】作業や、【日常のエピソードを整理する】ことで、自分の関心に関連する心理学の知識を蓄積し、そこで見出された【キーワードを調べる】ことによって、学生は〈知識の整理の工夫〉に取り組む。この段階で一定の期間、試行錯誤の循環が生じるようである。このつまづきを乗り越えるということは、学生がこれまでに収集してきたエピソードやキーワードを素材にして、自分自身の関心を心理学の構成概念に関連させて表現し、関連する概念をさらに調べる〈心理学概念につなげる〉作業が可能となることを意味する。自身の研究のキーワードとなる概念を手に入れることで、研究は一步前進する。しかし、研究に取り組む中で、「書きたいことはいっぱいあるんですけど、どれから順番に書いていっていいかまとまらない

（CaseB）」、「実際、自分が何をしたいのかな（CaseE）」といった【研究テーマの内容における停滞】が生じる。一度は明確になったキーワードに自信が持てなくなるなど、内容について再検討が必要となる。また初めて取り組む卒業研究の展開がわからず、見通しが得られないことで【卒業研究の進め方がわからない】事態に陥ることで＜第二のつまづき〔停滞〕＞が生じる。学生は試行錯誤の末に、一步研究が前進したにもかかわらず停滞することで、「研究することから一時的に離れる（CaseE）」など大変さを経験していることが伺われる。この状態を打破するための取り組みとして、【個人で1つずつ考えを整理する】ことや【仲間とのディスカッション】によって研究を言語化する作業が＜思考の整理の工夫＞として重要なポイントとなる。じっくりと自身の考えを練る作業によって、自身の思考が熟していく場合もあれば、「悩んでいることをため込みすぎると自滅していく感じだった（CaseA）」という語りが示すように、思考が拡散したり、混乱するという事態が生じる場合もあるようである。そのような時には、仲間と研究を「語る」作業が重要であろう。「自分の言葉で話すということに僕はすごい意味があって（中略）自分はこうしたいのかなとか、こういうところが気に入っているから、こんなに語れるんだろうと思う（CaseE）」という語りに見られるように、自身の研究を「言葉」に出して、仲間（他者）に語ることは、自分自身の思考を客観的に捉えることになると同時に、異なる視点を持つ仲間からのフィードバックも得ることができる。このような思考の整理を繰り返しながら、また一定期間の試行錯誤が体験される。

その過程の中では、「迷走を重ねて、何をすれば良いかわからなくなった（CaseD）」、「興味があっても、それがうまく説明できなくなったら違うことを考える勇気も大事（CaseC）」という語りから伺われるように＜研究テーマの変更＞が必要となる場合もある。この決断をするためには、今まで取り組んできたことを一度白紙に戻すことにもなるため、勇気や覚悟が必要となり、学生の停滞をめぐる試行錯誤の後の一つの前向きなアクションとして捉えることができる。反対に、自身の研究をめぐる停滞のプロセスの中で、【次の課題が明確になる】経験や【自分の中の研究の軸が明確になる】体験を重ねることによって、＜研究の方向性の定着＞が生じる。どのような課題に今後取り組

んでいくことが重要なかが明確となり、自分の研究を自信を持って語ることができるようになると、研究は軌道に乗ってくる。そしてこの段階になると、自分の研究に関連する【新しい知識獲得の喜び】や【研究が楽しい】という感覚を言葉に出して語れるようになる。重要と考えられるのは、ここでの研究の楽しさの感覚は、研究の楽しさと同時に、つらさや大変さを認識している点である。卒業研究の取り組みは、一定期間の連続した取り組みであることから、楽しいか、大変かという1次元的なものでは捉えられないだろう。

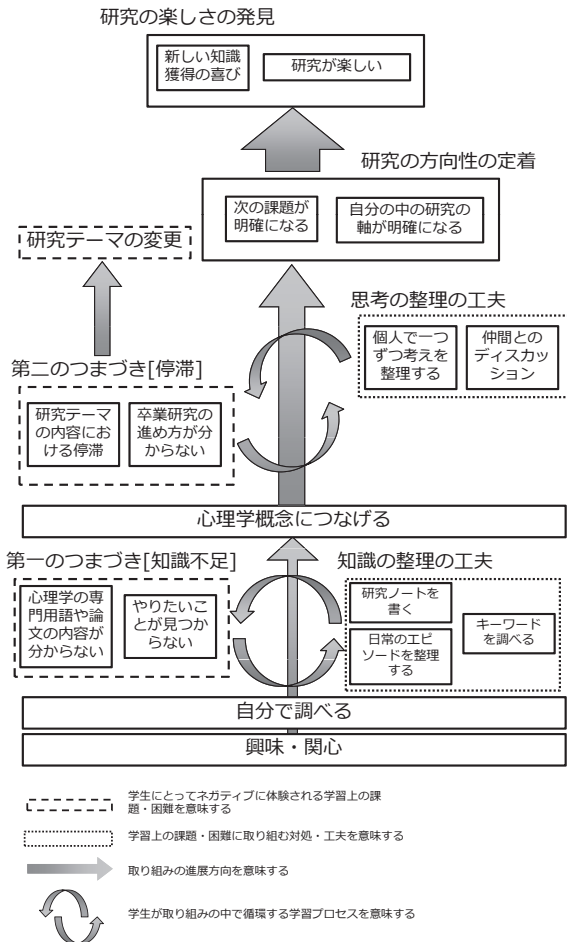


図1 学生の語りから生成された学習上の課題と学びのプロセスモデル

3-3. 心理学における専門教育の中で得られたもの

では、このような取り組みを通して学生は具体的に何を得ているのだろうか。心理学を学ぶ中で得られた良かった経験についてエピソードを収集した(表5)。「論理的な文章構成力」、「物事を論理的に理解しようとする姿勢」、「(テレビなどのコメンテーターや報道について) 根拠に基づく言説なのかについての関心」や「日常生活の中にある心理学的現象にふと気づくこと」、「共に学ぶ仲間(ゼミナールのメンバーや教員)の存在」、「新しい視野や視点の獲得」といった内容が得られた。上述の学習のプロセスの中で、学生は論理的な思考力や記述力、また批判的思考力といった力を獲得していることが示唆される。同時に、研究に取り組む過程において、ゼミナールの仲間・教員との関係性も学生にとって有益な体験となっていることが確認された。見えない「こころ」を扱う心理学において、他者との対話やディスカッションは、時に自身の内界を反映する鏡のように機能する。先の見えない停滞状況の中から、新しい方向性や視点を見出す際に、この仲間の存在が大きく貢献していることが本研究のモデルからも伺われる。そして何よりも、実社会で生きている中で、困った時に仲間に頼ることや支援を求める力もまた重要な学びの一つであると言えよう。

表5 心理学を学ぶ中で得られたことに関する語り

楽しくなりました。一緒に学ぶ仲間であったり、心理学の使い方、日常生活において、あっこれも心理学だったと思うことや、テレビである心理学的なことを自分なりに考えることができるようになって楽しいと思います。

何事にも文を書いたりするときに論理的に書かなくてはいけないので、日常生活において物事の矛盾などを見つけたりするのが上手ようになった。あと、不思議に思ったことをすぐ調べるとか、考えたりする姿勢が身についたかなと思います。

まだ全然研究自体は進んでないんですけど、研究している内容が知識として入ってくるので、生活の中で役に立つこともあるなと感じます。あと、迷走はしてますけど、研究は楽しいかなと思います。研究することで、知識欲は満たされますし、やっぱりその中で色々気づくことがあります。自分の生活だったり、自分自身の特徴について先行研究やデータから発見できることがあります。

例えば、テレビなどを見ているときにも、出演しているコメンテーターが話しているときに、きちんと根拠も一緒に話しているのかが気になるようになりました。あと話の組み立て方などを気にするようになりました。卒論を書いていく時でも、先行研究の根拠があって、話を進めていったりするので。エビデンスに対する関心が高くなったということですかね。あとは、文章の構造や構成についても意識するようになりました。

心理学を学ぶことによって、「こういう心理だから、こういう行動になりやすい」など多くの先行研究に触れることができますから、自分が見える世界の視野が広がっていったところですね。

*コメントは抜粋しましたが、ケースが特定されないよう順不同で示した

また、これから心理学を専攻しようとする後進へのアドバイス・エールを収集した（表6）。その内容は「心理学の基礎的知識の習得のために、カリキュラムで組まれている学習に取り組んでほしい」とする基礎学習の重要性を指摘するものと、「一人で抱え込まずに、相談することが重要」といった卒業研究に取り組む姿勢に言及するものに大別することができる。

表6 これから心理学を専攻する後進へのアドバイス・エールに関する語り

カリキュラムが私の次の世代から徐々にしっかりとしたものになっているとおもうので、授業をしっかりと組んだ方がいいかなと思います。私たちの世代は、カリキュラムがなかったので、知識がないということがこんなに大変なことなのか、1から学ぶことが本当に大変というところからスタートだったので、しっかりと勉強してゼミに入るのが良いかなと思います。ゼミに入ってからになるかと思いますが、一人で悩まずるのは大変なので、頼れるところに、先生なり友達なりに頼って、相談することが大事だと私は思いました。

一人で悩まずに、友人や先生と自分の悩みを共有してもらいたいです。一人でできる研究はないと思いました。自分の分からないことを研究していくので、知らないこともいっぱいできます。自分以外の人なら気づくこともあるので、そういう意見をもらうことで研究は進めていけるのかなと思います。

（ゼミを選択する前に）ちゃんと勉強してくださいということでしょうか。今まで勉強してきた専門的な話や自分が何をしたいのかを持っていないと、ゼミの他の人の発表や先生のコメントについていけなくなるから。あと自分のやりたいことをある程度は考えていないと、後になって混乱してきたりするので、ある程度しっかりと勉強をして、自分自身の関心を整理するということは大切だと思います。

心理学だからではないと思いますが、1回やると決めたら、きちんとやる姿勢が大切だと思います。研究のテーマについては、興味があるないで決めるのも大事だと思いますが、ある程度進める中で、それからどうして行きたいのかで詰まる時には、あえてそれを変えることも大事かなと思います。

何にでも興味を持つことかと思います。ゼミでの研究は、自分がやりたいことを進めていくことになると思うけれど、興味がなければ最後まで辿り着かない。しんどい作業かもしれないけれど、自分が少しでも興味があるものを見つけようとして、あるいは周りのものに興味を向けて、その中で、少しずつその関心を絞っていくという作業は大切だと思います。

*コメントは抜粋したが、ケースが特定されないよう順不同で示した

前者について、特に4年生からは「自分たちの時には（カリキュラムが）無かったので苦労した」と、後進の学生に強く履修を推薦する語りが得られている。卒業研究を開始する段階で基礎的な知識がある程度習得されていることは、論文購読やキーワードとなる心理学概念の選定の際の作業を容易にするだろう。この点は、専門教育におけるスムーズな学習を実現させるためにも重要なポイントであると言える。また基礎的な専門的知識だけではなく、カリキュラムにおける学習から研究の関心の種とも言える「興味を涵養することの重要性」を

指摘する語りも見逃せない。本研究において示されたモデルにおいても、卒業研究の取り組みを支える最も基礎的な要因として、研究につながる自分自身の「興味・関心」が挙げられた。カリキュラムで提供される幅広い知見や体験から、自分が興味を寄せ、時間をかけて検討してみたいアイデアを収集しておくことは、重要なポイントであろう。そして自分の関心に焦点を向けていくことは、ゼミナールでの専門教育のみならず、2年次までのカリキュラムにおける学びを、より身近なものとして感じさせ、学習意欲に肯定的な影響を及ぼすのではないかと考えられる。ぜひ能動的かつ主体的な関心の向け方を日々の授業の中でも意識してほしい。

後者は、「一人で悩まずに」、「先生や友人に頼って、相談すること」が大切であると指摘するコメントが多かった。「一人でできる研究はないと思います」という言葉に集約されるように、個人で行う作業が多い卒業研究ではあるが、本研究で示された様々な困難や課題を打破し、新しい展開を生むためには、仲間や教員とのディスカッションに代表される相互作用が不可欠であることが明らかとなった。また「行き詰まる時には、あえて変更する勇気も」という指摘にみられるように、研究が停滞し、混乱が生じた際には、関心のある他のキーワードを調べたり、その段階の自分の考えを「他者に語る」ことを通じて、客観的に「自身の思考を整理すること」が有効である。これらの語りは、作業をしている当事者の思考の整理について言及されたものであるが、山田（2012a; 2012b）が指摘するようにペア制度など他者との交流を前提とするような取り組みの工夫によって、作業の見通しや課題の内容などに関するより活発な交流が期待できるだろう。また卒業研究に対する取り組みの継承という観点から考えてみると、先輩の卒業研究に後輩が関わること（卒業研究の調査の手伝いや分析補助など）によって、「先輩と後輩」の異世代での積極的な交流が生じるだろう。卒業研究の取り組みやその内容についての見通しを得ることができるという意味においても、先輩との交流は後輩の学びにおいて重要な影響を及ぼす可能性があるであろう。

また、今回の調査協力者の全員が研究において困難を体験し、「混乱」や「停滞」の体験を語っているが、同時に「でも研究は楽しい」と語っていることに

注目したい。様々な苦闘があるからこそ、彼らが新しい視点を獲得し、研究の方向性を見出した時の成長や達成感が存在するはずである。冒頭で述べたように、心理学の研究を立案する作業は、自身の興味や関心を素材としながら様々な先行知見を参照し、追求する作業である。その過程で、論理的思考力や客観的な概念操作を可能とする経験が学生に生じ、また心理学の知識は、彼らの日常において生じる素朴な疑問に回答を与えることや、新しい視点を提供する可能性が確認できたことは有意義なことである。

最後に本研究の限界について述べておく。これまで彼らの学びの内容について、その課題と進展のプロセスを質的に検討してきたが、本研究で捉えることができた卒業研究の取り組みは、研究テーマの設定と方法論の策定の段階のものであった。データを収集し、分析する段階になれば、また異なる課題が想定されるだろう。継続的に学生の学びに関する検討を続けていくことが望まれる。さらに、今回調査協力者として語りを提供してくれた学生は、心理学研究に対して積極的な姿勢が認められ、もともとある程度の「興味・関心」を有していた。本研究のモデルの根幹をなしていた(卒業研究において検討したいテーマについての)「興味・関心」が希薄な学生の学びのプロセスには、また異なる課題が存在するはずである。これについても今後さらなる検討が必要だろう。

引用文献

- 芳賀康朗・川島一晃（2015）． 学部における心理学専門教育の導入に関する一研究
皇學館大学紀要, 54, 33-54.
- 木下康仁（2003）． グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への
誘い 弘文堂．
- 木下康仁（2007）． ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・
セオリー・アプローチのすべて 弘文堂．
- 能智正博（2000）． 質的研究法 下山春彦（編）臨床心理学研究の技法（pp.56-65）
福村出版．
- 小塩真司・宅香菜子（2015）． 心理学の卒業研究ワークブック発想から論文完成ま
での10ステージ 金子書房．

- 学部における心理学専門教育の導入に関する一研究（3）（川島・芳賀・望木）
都筑学（2006）．心理学論文の書き方 有斐閣アルマ．
- 山田嘉徳（2012a）．ペア制度を用いた大学ゼミにおける学びはどのように構成されているのか－卒論への備えに着目して－ 日本教育心理学会第54回総会発表論文集，446．
- 山田嘉徳（2012b）．ペア制度を用いた大学ゼミにおける文化的実践の継承過程 教育心理学研究，60，1-14．

註

- 1 本稿で対象となる学生が所属するゼミナールでは、研究室メンバーおよび教員との定期的な研究発表・ゼミナール内外の個別のディスカッションが豊富に提供されていることを付記しておく。
- 2 なお、現行の心理学教育カリキュラムでは、各心理学領域における専門科目（学習・認知・発達・臨床心理学）、心理学研究法Ⅰ・Ⅱ、心理学実験実習Ⅰ・Ⅱなどにおいて、想定される専門知識の習得を目指している。

A Study on the Introduction of a Psychology Curriculum
into Undergraduate Education (3).

Kazuaki KAWASHIMA, Yasuaki HAGA, Ikuyo MOCHIKI

Abstract

Qualitative consideration about challenges and outcomes on what kind of learning is given to beginners who have decided to major in psychology has not been examined enough. The purpose of the present study was to consider the merit and the challenges of the learning experiences, and the process of beginners' graduation study. Semi-structured interviews about the learning experience were conducted with five participants. That material was analyzed with a modified grounded theory approach (M-GTA), which resulted in 10 categories and 13 concepts. Beginners started to study from their "interests", and "searched the materials", but they experienced "their first failure [the lack of their knowledge]." The "Acquisition of knowledge" helps to "connect their interests to psychological constructs" which enables them to advance their studies. However "the second failure[delay]" brings trials and errors to beginners to "settle the direction of the study." Settling the direction enables beginners to discover "the taste of their study."

Keyword : beginner, graduation study, learning process

